陸軍敬禮式附錄

凡ソ陸軍武官將ニ室內ニ入ントスル時ハ必ス先ツ戶外ニ於テ帽ヲ脫スヘシ

但士官以上ノ者下士官以下ノ室內ニ入ル時ハ脫帽答禮ノ後直ニ帽ヲ著クルモ可ナリ

室內ニ在テ互ニ禮ヲ行フニハ先ツ其人ニ對シ正面直立シ體ノ上部ヲ傾クヘシ

但將校ノ下士ニ於ルハ此禮ヲ用ヒス

室內ニ入來ル者已ヨリ上班ナルカ或ハ同班ナル時ハ其座ヲ離レテ禮ヲ爲スヘシ若シ下班ナル時ハ其儘答禮スルモ妨ケナシ

但上班ト稱スル者ハ尉官ノ佐官ニ於ル下士官ノ尉官ニ於ルカ如シ同班ト稱スル者ハ佐官ノ佐官ニ於ル尉官ノ尉官ニ於ルカ如シ

上班ノ者室中ニ來ル時關係アル本人ノ外傍ラニ在テ事務ニ服スル者ハ一旦禮ヲ行フノ後各其事ニ服スヘシ

室內ニ於テ公務ヲ談スル時下班ノ者其上班ノ者ニ對シテ自ラ座ニ就クヲ許サス

但上班ノ者ヨリ之ヲ許スハ此限ニアラス

凡ソ陸軍仕身ノ者其等級ニ從ヒ彼我禮ヲ行フヿ總テ武官ニ異ナルヿナシ

第七百二十八　明治七年三月十三日陸軍省達

第百三十五號

七年陸軍省百三十五號達ヲ以テ一節ヲ增加ス

陸軍敬禮式附錄左ノ一節增加致シ候條此旨相達候事

增加一節

凡ソ書翰使或ハ命令使タル下士官兵卒之銃ヲ携フル者ハ室內ニ入ルト雖モ尙敬禮式第九條之通タルヘシ

第七百二十九　明治十一年一月三十一日達　各通　陸軍省　海軍省

勳章ヲ佩ル者ニ對スル陸海軍番兵敬禮式左ノ通被定候條此旨相達候事

勳章ニ對シ行フヘキ陸海軍番兵敬禮式

大勳位菊花大綬章

大勳位菊花章

勳一等旭日大綬章

勳二等旭日重光章

勳三等旭日中綬章

右銃ヲ捧ケ敬禮ヲ行フ

勳四等旭日小綬章

勳五等雙光旭日章
勳六等單光旭日章
右銃ヲ肩ニシ敬禮ヲ行フ
勳七等青色桐葉章
勳八等白色桐葉章
右不動ノ姿勢ヲナシ銃ヲ腕ニ執リ或ハ足傍ニ執リ敬禮ヲ行フ
武官ニノ勳位ニナスヘキ敬禮ヨリ重キ敬禮ヲ受クヘキ官職アル者ハ重ニ從テ敬禮ヲ行フ
略綬ヲ着ル者ハ此限ニアラス

第七百四十 明治九年十一月廿二日達

第百十一號

海軍禮砲條例別冊之通被定候條此旨相達候事

院省使廳府縣

別冊

海軍禮砲條例

第一條 天皇陛下ヘノ禮砲ノ數ハ二十一發ニシテ之ヲ皇禮砲トス

第二條 天皇陛下禮砲ヲ爲スヘキ堡砦或ハ砲臺有ル地ニ着御發御ノ時ハ此堡砦砲臺及ヒ其港内在泊ノ諸軍艦ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發スヘシ

第三條 軍艦ニ臨御ノ時ハ其港在泊ノ諸軍艦ニ於テ滿艦飾ヲ爲ス可シ御艇本艦ニ接近スルトキ其艦ニ於テハ水夫長二員舷側ニ在テ同音ノ號笛ヲ吹キ二員ノ士官或ハ士官補艦梯上下ノ兩側ニ立テ奉迎シ海軍將官又ハ指揮官及ヒ艦長ハ梯邊ニ奉迎シ其他ノ諸士官ハ官等ニ從テ後艦甲板上艦梯ノ側舷ニ整列シ樂隊ハ其對舷ニ整列シ水兵ハ諸桁上ニ整列ス其他ノ諸員ハ前舳ニ整列ス此時副長ノ祝聲ニ應シテ桁上ノ水夫一同祝聲ヲ發スルヿ總テ三回ス又本艦ニ連接スル諸艦艇ニ於テモ齊ク水夫ヲ諸桁上ニ整列セシメ本艦ト同ク祝聲ヲ發ス可シ

第四條 艦内ニ乘御ノ時ハ御旗ヲ大檣頂ニ海軍旗ヲ前檣頂ニ國旗ヲ後檣頂ニ揭ク但シ此時本艦ニ將旗ヲ揭ケアレハ之ヲ下シ若シ此三旗ヲ揭ク可キ三檣ヲ有セサル艦船ニテハ支檣或ハ旗竿ヲ設立シ此旗ヲ揭ク諸士官以下敬禮シ水兵ハ捧銃シ樂隊ハ奏樂シ同時ニ皇禮砲ヲ發ス諸軍艦ニ於テモ亦本艦ノ禮砲第二發目ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發シ最後ノ砲發ニテ諸艦艇桁上ノ水夫皆甲板上ニ下ル可シ但シ御艇ニハ唯御旗及ヒ國旗ヲ揭クルノミ

第五條 軍艦ニ乘御シ航行アルトキハ滿艦飾ハ總テ除キ唯本艦ニ於テ御旗海軍旗及ヒ後檣ノ國旗ヲ揭ク然レトモ航行中ハ唯御旗ノミヲ揭クルヿアルヘシ

第六條 還幸ノ時モ其禮式前ニ同シ但シ艦梯通御ノ時水夫ヲ桁上ニ列立シ御艇ニ乘御アラハ三回祝聲ヲ發セシム御艇ニ御旗ヲ揭クルトキハ本艦ノ御旗ヲ國旗ト交換シ御艇本艦ヲ離

ル丶ノ後皇禮砲ヲ發ス其他ノ諸軍艦ニ於テモ同ク水夫ヲ桁上ニ列立シ三回祝聲ヲ發セシメ本艦ノ禮砲第二發目ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發スヘシ

第七條　諸艦船ノ近傍ヲ通御ノ時ハ其艦船ニ於テ艦長副長當直士官及ヒ喞號手ハ遠望臺ニ諸士官ハ後艦ニ整列シテ敬禮ヲナシ樂隊ハ奏樂シ水兵ハ桁上ニ列立シテ三回祝聲ヲ發ス可シ

第八條　乘御ノ端艇ニハ副長少佐或ハ時トシテ大尉一員指揮ヲ司リ少尉楫ヲ管掌ス其敬禮法ハ艦船上ニテハ前數條ノ如シト雖モ諸端艇ニ於テハ楫ヲ建テ總員脫帽直立スルニ止マル

第九條　航御ノ時其艦船ニ御旗海軍旗及ヒ國旗ヲ揭揚スル時ハ之ニ逢フ所ノ諸軍艦ハ必ス皇禮砲ヲ發ス可シ又其禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺ノ近傍ヲ通御ノ時ハ該堡砦砲臺及ヒ同所ニ在泊ノ軍艦ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發ス可シ

第十條　乘御ノ艦船在泊セル港內ニ來着スル諸軍艦及ヒ御旗ヲ揭ケタル海岸ノ近傍ヲ航行スル諸軍艦ハ必ス皇禮砲ヲ發ス可シ

第十一條　御艦若シ海軍旗國旗ヲ揭ケス唯御旗ノミヲ揭クルトキハ諸軍艦及ヒ堡砦砲臺ヨリ皇禮砲ヲ發セサルモノトス但シ軍艦ハ臨時發砲スル事アル可シ

第十二條　太上天皇太皇太后皇太后皇后皇太子及ヒ皇太子妃皇子皇女ニハ天皇陛下ト同一ノ敬禮ヲ爲シ皇禮砲ヲ發ス可シ但太上天皇太皇太后皇太后皇后皇太子及ヒ皇太子妃ニハ御旗ヲ用ヒ皇子皇女及親王ニハ皇族旗ヲ用フ可シ

第十三條　皇子皇女艦船ニ乘艦ノ時ハ皇族旗ヲ其艦船ノ大檣頂ニ揭ク可シ但シ其式總テ臨幸ノ時ト同ク唯海軍旗ヲ揭ケサルノミ

第十四條　皇族旗ヲ揭ケタル艦船ニ逢フ諸軍艦ハ必ス皇禮砲ヲ發ス可シ

第十五條　御旗及ヒ皇族旗ヲ揭ケタル艦船ハ唯皇禮砲ヲ受ルノヨニシテ答砲ヲナスヿナシ總テ此旗章ヲ揭揚セル艦船在泊中ハ他ノ諸艦船ハ祝砲ヲ交換スルヿナシ但シ外國艦船トノ關係ハ此限ニ在ラス

第十六條　御艦外國ノ艦船ヨリ皇禮砲ヲ受クルトキハ我カ先任官乘組ミノ一艦ヨリ答砲ス可シ若シ他ニ軍艦ナキトキハ御艦ヨリ答砲ス可シト雖モ其御艦軍艦ニ非レハ答砲セス又內外國ノ艦船同時ニ皇禮砲ヲ發スルトキハ之ニ答砲スル事ナシ

第十七條　左ニ記載セル祝日ニハ諸艦船總テ滿艦飾ヲ爲シ各軍艦及ヒ堡砦砲臺ヨリ正午ニ皇禮砲ヲ發ス可シ

紀元節　天長節

第十八條　左ニ記載セル祭日祝日ニハ諸艦船總テ艦飾ヲ爲ス可シ

一月一日　孝明天皇例祭

第十九條　外國ノ皇帝或ハ太子及ヒ其后妃又ハ大統領我カ領內禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺有

ル地ニ到着シ又此地ヨリ退歸スルコアラハ其到着ト退歸ノ時トニ於テ其堡砦砲臺ヨリ皇禮砲ヲ發シ又同所碇泊ノ諸軍艦ニテ其國旗ヲ大檣頂ニ揭ケ滿艦飾ヲ爲ス可シ其他總テ我カ天皇陸下ニ於ケル式ト同一ナリトス又內外國ノ港內ニ在泊セル我カ軍艦ニ來乘及ヒ退艦ノ時ニ於テモ其敬禮ノ式同一ナル可シ但シ大檣頂ニ其固有ノ旌旗ヲ揭ク可シ

第二十條　外國ノ皇族我カ港灣ニ來着シ或ハ內外港內ニ於テ我カ軍艦ニ來乘スルトキハ其艦ノ大檣頂ニ其固有ノ旌旗ヲ揭ケ其他ハ總テ我カ皇族ニ於ケル敬禮ノ式ト同一ナル可シ

第二十一條　我カ諸軍艦內國ノ諸港ニ在テ同港在泊ノ外國軍艦ノ其本國ニ於ケル祭祝日或ハ外國ノ諸港ニ在泊シ該國ノ祭祝日及ヒ同港ニ在ル他ノ外國軍艦ノ其本國ニ於ケル祭祝日等ニ會スルノ時其外國ノ軍艦ニモ滿艦飾或ハ艦飾ヲ爲シ禮砲ヲ發シ又ハ堡砦砲臺ニ於テ禮砲ヲ發スル等彼レヨリ告知アラハ我カ各軍艦ニテモ亦彼レト同時ニ同樣ノ艦飾ヲ爲シ禮砲ヲ發ス可シ其砲數ハ二十一發ヲ超ユ可カラサル者トス但此禮砲ニハ其答砲ヲ要セス

第二十二條　太政大臣左右大臣及ヒ特命全權辨理大臣各公使領事ヘノ禮砲ハ各官職ニ從テ其砲數ヲ定ムル事左ノ如シ

太政大臣左右大臣	十九發	特命全權辨理大臣	同
特命全權公使	十五發	辨理公使	十三發
代理公使	十一發	總領事	九發

領事	七發		

第二十三條　太政大臣左右大臣公務ヲ帶ヒ出行スルニ當リ特旨ノ命有ルニ於テハ其港出發及ヒ歸着ノトキ堡砦砲臺又ハ港內在泊先任官乘組ノ軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス但同港ニ在泊セル數艘ノ軍艦ニ同日來乘スルトキハ唯先任官乘組ノ一艦ヨリ禮砲ヲ發スルノミ又其軍艦ニ乘組航行スルトキハ最初乘艦最後退艦ノ際トニ於テ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第二十四條　太政大臣左右大臣公務ヲ帶ヒテ乘組シ內外ノ軍艦或ハ軍艦ニ非サル諸船舶ニ於テ其乘艦ヲ表スルカ爲メ大檣頂ニ國旗ヲ揭クル事アルトキハ海上ニテ之ニ逢フ軍艦及ヒ其發着ノ港內ニ在泊セル先任官乘組ノ軍艦ハ必ス相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第二十五條　太政大臣左右大臣ニ對シ外國ノ軍艦ヨリ禮砲ヲ發スル時ハ同數ヲ以テ之ニ答砲ス其我カ軍艦ヘノ答砲ハ其官職相當ナル砲數ヲ以テス但シ指揮官ニ非サル大佐以下ノ艦長ヘハ七發ヲ以テ答砲ス可シ

第二十六條　特命全權辨理大臣公務ヲ帶ヒ我カ領內禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺有ル地ニ着スルトキハ相當ノ禮砲ヲ發ス若シ軍艦ニ乘組ミ航行スルトキハ最後退艦ノ際亦相當ノ禮砲ヲ發ス但シ此例ハ外國ノ港內ニ於テモ通用スルモノトス

第二十七條　特命全權公使ヘノ禮砲ハ唯其駐劄國ノ領內諸港ニ於テノミ發スルモノトス故ニ若シ軍艦ニ乘組ミ差遣セラルヽ國ニ航行スルトキハ其港內ニ到着上陸ノ時ニ非サレハ其

軍艦ヨリ禮砲ヲ發セサル可シ

第二十八條　特命全權公使公務ヲ帶ヒ其駐劄國ノ領内諸港ニ在泊セル我カ軍艦ニ來乘スルトキハ其退艦ノ際相當ノ禮砲ヲ發ス又領内ノ一港内ニ於テ同日我カ數艦ニ來乘スルトキハ其内ノ一艦ノミ禮砲ヲ發ス且數回同艦ニ來乘スルモ禮砲ヲ發スルハ十二ケ月ニ唯一回ナリトス其歸朝迎接ノ命ヲ受ケタル軍艦ニ乘組マハ其乘艦ノ際ノミ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第二十九條　辨理公使及ヒ代理公使ヘノ禮砲モ亦前二條ノ規則ニ同シ

第三十條　總領事及ヒ領事公務ヲ帶ヒ我カ軍艦ニ來乘スルトキハ其退艦ノ際相當ノ禮砲ヲ發ス又數艘ノ軍艦ニ同日來乘スルモ第二十八條ノ例ニ準ス但此禮砲ハ其駐劄セル外國港内ニ於テノミ發スルモノトス

第三十一條　外國ノ大使及ヒ諸公使領事ニハ前數條ノ規則ニ準シ堡砦砲臺或ハ軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第三十二條　陸軍卿及ヒ海軍卿ヘノ禮砲ハ其砲數ヲ定ムル事左ノ如シ

陸軍卿	十五發	海軍卿	同

第三十三條　陸軍卿及ヒ海軍卿公務ヲ帶ヒ禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺アル地ニ到着セルトキハ其堡砦砲臺ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス又軍艦ニ來乘スルトキハ發艦ノ時其軍艦ヨリ禮砲ヲ發ス若シ同港ニ於テ同日數艘ノ軍艦ニ來乘スルトキハ退艦ノ際唯一艦ノミ禮砲ヲ發ス其軍艦ニ乘組ミ航行スルトキハ其乘艦退艦ノ際ニ於テ其軍艦ヨリ禮砲ヲ發ス可シ

第三十四條　海軍卿公務ヲ帶ヒテ乘艦シ大檣頂ニ海軍旗ヲ揭クルトキハ其港ヘ來着ノ軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス且軍艦海上ニ於テ此旗ヲ揭ケタル艦ニ相逢フモ其禮同シ又同艦我カ領内ノ港灣ニ到着スルトキ港内ニ軍艦數艘在泊セハ其内先任官乘組ミノ一艦ヨリ禮砲ヲ發ス可シ

第三十五條　陸海軍將官及ヒ大佐ヘノ禮砲ハ各官等ニ從テ其砲數ヲ定ムル事左ノ如シ

陸軍大將	十五發	海軍大將	同
陸軍中將	十三發	海軍中將	同
陸軍少將	十一發	海軍少將	同
陸軍大佐　少將ノ代理	九發	海軍大佐　艦隊指揮	同
海軍大佐以下ヘノ答砲	七發		

此將官及ヒ大佐海軍管轄場ノ指揮長官或ハ陸軍鎭臺ノ司令長官ヲ勤務スル時ハ本官相當ノ砲數ニ二發ヲ增加ス可シ

第三十六條　鎭守府ノ司令長官或ハ艦隊又ハ艦船ノ指揮長タル將官及ヒ大佐禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺アル地ニ到着シ初テ上陸スルトキハ其堡砦砲臺ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス又鎭臺或ハ軍隊ノ指揮官タル陸軍將官及ヒ大佐公務ヲ帶ヒ軍艦ニ來乘セハ退艦ノ際其軍艦ヨリ相

當ノ禮砲ヲ發ス然レ𪜈此陸軍少佐同日同港ニ於テ數艘ノ軍艦ニ來乘スル時ハ唯其内ノ一艦ノミ禮砲ヲ發ス

第三十七條　前條ノ禮砲陸海軍ノ別ナク將佐官ニ對シ外國ニ於テハ十二ケ月間ニ一回本國ニ於テハ三ケ年間ニ一回トス若シ十二ケ月或ハ三ケ年ニ滿タスシテ其將佐ノ官等昇進スル𪜈ハ其年月以内ト雖𪜈昇進ノ官等ニ從テ其禮砲ヲ發ス但シ此禮砲ニハ其答砲スルヿナシ

第三十八條　海軍將官及ヒ大佐艦隊或ハ艦船ノ指揮官トナリ初メテ其艦ニ將旗或ハ代將旒ヲ相當ノ檣頂ニ揭ケ又ハ官等ノ昇進ニ因テ其旗旒ヲ換揚シ或ハ其職ヲ罷メ其旗旒ヲ下ス𪜈該指揮官其港内ニ於テノ先任官タル𪜈ハ之ニ亞クノ先任官乘組ミノ一艦ヨリノミ之ニ相當ノ禮砲ヲ發ス若シ其港内ニ於テ該指揮官ヨリ上級官乘組ノ軍艦アル𪜈ハ之ニ對シ該指揮官ノ乘官ヨリ先ツ相當ノ禮砲ヲ發ス然レ𪜈他ニ禮砲ヲ發スヘキ艦ナキ時ハ該指揮官乘組ノ艦獨リ禮砲ヲ發ス可キモノトス但該官在職中他ノ事故ニ依テ其旗旒ヲ揚ケ又ハ下スヿアル𪜈其禮砲ハ十二ケ月間ニ唯一回ニ限ルヘシ

第三十九條　將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐初メテ先任官ニ會合スル𪜈ハ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ但シ艦隊指揮官タル大佐其指揮官ニ非サル先任大佐ニ相逢フ時ハ此例ニアラス

第四十條　將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐各自艦隊ヲ率非テ會合スル𪜈ハ唯各艦隊ノ先任將官又ハ指揮官タル先任大佐ノ一艦ヨリ此諸艦隊中最上官タル將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ對シテノミ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第四十一條　凡ソ軍艦初メテ將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ會合スル時其將官或ハ大佐先任官タルニ於テハ之ニ對シ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ若シ二艘以上ノ軍艦同時ニ將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ會合スル𪜈俱ニ該官ノ所屬ナル𪜈ハ其内先任官乘組ミノ一艦ノミ相當ノ禮砲ヲ發ス但シ各自其所轄ヲ異ニスル𪜈ハ各自ニ禮砲ヲ發ス可シ

第四十二條　後任ノ將官又ハ艦隊指揮官タル大佐ヨリ海軍旗或ハ將旗又ハ代將旒ヲ揭ケタル艦ニ對シ禮砲ヲ發シタル時ハ該艦ヨリ此將官又ハ大佐ヘ其官職相當ノ砲數ヲ以テ答砲ス可シ然レ𪜈其禮砲ヲ發シタル士官艦隊指揮官ニ非サル大佐以下ナル𪜈ハ七發ノ數ヲ以テ之ニ答砲ス可シ

第四十三條　將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐又ハ艦長タル佐尉官二員以上ヨリ海軍旗或ハ將旗又ハ代將旒ヲ揭ケタル艦ニ對シ禮砲ヲ發シタル𪜈ハ受タル其砲數ヲ以テ該艦ヨリ唯一回答砲ス可シ假令ヒ其在職中數回ノ會合ヲナスト雖𪜈其禮砲ヲ發スルハ唯一回トス但シ官等昇進ニ由テ將旗或ハ代將旒ヲ換揚セル𪜈ハ此例ニ在ラス

第四十四條　艦長タル大中少佐及ヒ大中尉又ハ其他ノ士官ハ海軍ノ艦隊指揮官タル大佐或ハ陸軍少將ノ代理タル大佐ヨリ下等ノ士官ニ對シテハ外國何レノ地方ニ於テモ禮砲ヲ發スル事ナシ

第四十五條　將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐又ハ艦長ニ對シ內國或ハ外國ノ商船ヨリ禮砲ヲ發シタルトキハ一艘ノ商船ヘハ五發數艘ノ商船ヘハ七發ヲ以テ答砲ス可シ但シ他官省所轄ノ船舶モ之ニ準ス

第四十六條　外國ノ貴官及陸海軍省ノ長官或ハ將官又ハ指揮官タル大佐等ニ發スル禮砲ハ總テ我國ノ定制ニ照準ス若シ其諸官ト同官職タル我カ貴官及陸海ノ長官或ハ將官ニ對シ外國ノ軍艦ヨリ發シタル禮砲我國ノ定制ヨリ多數ナルトキハ其外國ノ諸官ヘ對シテモ亦同數ノ禮砲ヲ發ス可シト雖ヒ其數十九發ヲ超ヘサルモノトス但シ此禮砲ニハ必シモ其答砲有ルモノト期スヘカラス

第四十七條　外國軍艦ノ艦長タル大中佐我カ軍艦ニ公問スル時若シ嘗テ我カ軍艦ノ艦長タル大中佐其外國ノ軍艦ニ公問セシ時此軍艦ヨリ禮砲ヲ發シタル事アルニ於テハ其外國軍艦ノ艦長タル大中佐ニ對シテモ亦同數ノ禮砲ヲ發ス可シ

第四十八條　我カ軍艦締約國ノ港內ニ到着スル時ハ其國ニ對シ二十一發ノ禮砲ヲ發ス可シ但シ締約ニ非サル國ニ於テハ先ツ其港內ニテ彼レノ軍艦或ハ其地方官ニ禮砲ノ交換ヲナス可キヤ否ヤヲ照會シ其回答ノ旨ニ應ス可シ但十二ケ月ヲ經テ再ヒ同港ニ到着スルトキモ亦同一ナリトス然レトモ若シ我カ先任官乘組ミノ軍艦既ニ其港內ニ在泊セハ其令ヲ受ク可シ

第四十九條　外國ノ軍艦我カ領內ノ港灣ニ到着シ我カ國ニ對シ二十一發ノ禮砲ヲ發スルトキハ通常其地ノ堡砦或ハ砲臺ヨリ答砲ス可シト雖ヒ若シ事故アリテ其堡砦砲臺ニ於テ答砲スル能ハサルトキハ其港在泊ノ軍艦ヨリ答砲ス可シ

第五十條　我カ軍艦海上ニ於テ將旗或ハ代將旗ヲ揭ケタル外國ノ軍艦ニ出會スル時其指揮官我カ軍艦ノ將校ヨリ上等ノ官職ナルニ於テハ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ但シ外國ノ港灣ニ於テ會合スル時ハ其地方ニ於テ發砲ノ禁ナクハ海上同樣ノ禮砲ヲ發ス可シ

第五十一條　我カ軍艦ニ對シ外國ノ艦船ヨリ先ツ其國旗或ハ上帆ヲ下スカ又ハ彼我同時ニ之ヲ下スニ非サレハ我カ軍艦ヨリ先ンシテ之ヲ下ス可カラス

第五十二條　外國ノ皇帝大統領或ハ皇族ニ對シ皇禮砲ヲ發シ又ハ其國ニ對シ二十一發ノ禮砲及ヒ答砲ヲ發スルトキハ其時間彼レノ國旗ヲ大檣頂ニ揭ク又外國ノ艦船或ハ貴官ニ對シ禮砲及ヒ答砲ヲ發スルトキハ其時間彼レノ國旗ヲ前檣頂ニ揭ク可シ若シ既ニ此大檣頂或ハ前檣頂ニ將旗又ハ代將旗ヲ揭ケアルトキハ其大檣頂ニ揭ク可キ旗ハ前檣頂ニ揭ケ又前檣頂ニ揭ク可キ旗ハ大檣頂ニ揭クル事アルヘシ但シ答砲ハ本艦ノ禮砲終ルヤ否ヤ即時ニ發スルヲ以テ常トス

第五十三條　總テ禮砲ハ信號或ハ其他ノ方法ヲ以テ所在ノ海軍指揮官ニ通告スル後ニ非レハ軍艦ヨリ之ヲ發スルヿナシ但シ其指揮官ニ對スル禮砲ハ此例ニ在ラス

第五十四條　禮砲ヲ發ス可キ數職ヲ兼任スル貴官ニ對シテハ其兼任ノ官等中最モ多數ノ禮

砲ノミヲ發スヘシ

第五十五條　皇子ノ御降誕或ハ凱旋其他全國ノ慶賀アルトキハ海軍省又ハ指揮長官ノ令ニ依テ其禮砲ヲ發ス可シ

第五十六條　日出前日沒後及ヒ日曜日ニハ禮砲ヲ發セサルモノトス但シ特別ノ事件若クハ長官ノ令有ルトキハ此限ニ在ラス

第五十七條　總テ禮砲ヲ爲ス可キ海岸ノ砲臺ニ於テハ國旗ヲ揭ケ置キ禮砲或ハ答砲ヲ發スルニ其旌旗ヲ變換スルヿナカル可シ

第五十八條　砲臺及ヒ軍艦ヨリ同時ニ禮砲ヲ發スル時ハ砲臺ニ於テハ軍艦ノ禮砲第二發目ヨリ發砲ヲ始ム可シ

第五十九條　我カ艦船ト我カ領内ノ堡砦砲臺トノ間ニ於テハ何等ノ事件有ルモ其禮砲ヲ交換スル事ナキモノトス

第六十條　締約國ノ皇帝皇后或ハ大統領ノ生誕日及ヒ重大ノ祭祝日ニ於テ該締約國ノ軍艦我カ港内ニ碇泊スルトキハ其港ノ砲臺及軍艦ヨリ正午ニ其祝砲ヲ發ス可シ但シ其國ノ軍艦ハ碇泊セスト雖モ若シ他ノ締約各國ノ軍艦ヨリ之カ祝砲ヲ發スルトキハ我カ砲臺及ヒ軍艦ヨリモ齊ク其祝砲ヲ發ス可シ

第六十一條　締約各國ノ軍艦數艘同時ニ入港シ各檣頂ニ我カ國旗ヲ揭ケ二十一發ノ禮砲ヲ

海軍禮砲數表

二十一發	十發	九發	十七發	十五發	十發
天皇　太上天皇 太皇太后　皇太后 皇后　皇太子 皇太子妃　皇子 皇女　親王 ○クラウンヘッド ○サブリン ○プリンス ○ヒスコンソルト ○プレシデント、オブ、レパブリカン	太政大臣 左右大臣 特命全權辨理大臣 ○アンバセダール ○ロード、ハイ、アドミラル ○ロード、コミッショナース、ホール、エキスキユチング、ゼオツヒス、オブ、ロード、ハイアドミラル ○コンマンダン、インチーフ ○オツヒシヤール、コンマンヂング、 ○ホール、アーメー、オブ、エナイテッド、キングドム	○アドミラル、オブ、ブリート ○フヒールド、マーシヤル	大將 陸軍卿 海軍卿 特命全權公使 ○ファースト、ロード、コミッショナー、オブ、アドミラルテイ、 ○アドミラル、ゼネラル、 ○インポイス、エキストラオルヂナリー ○ミニスター、ブレニポタンシヤリー ○エンボイス ○ミニスター	中辨 ○ウミ ○リゼ ○ミヂ

大將以下一軍或ハ一艦隊ヲ指揮スル陸海司令長官ハ定數ニ二發皇族陸海軍ノ官格ヲ以テ乘艦スルトキハ其官相當ノ數ヲ以テス

五發	十三發	十一發	九發	七發	五發
將軍卿 軍卿 權公使	中將 辨理公使	少將 代理公使	大佐 陸軍少將代理 總領事	艦長へ答砲	商船ニ對シ 答砲二船以 上ナル時ハ 七發
ト、ロシ、オブ、アルテイ、ラル、ゼイス、ユラオルヂ、ター、ブタンシヤイスター	○ウバイス、アドミラル ○リウテナント、ゼネラル ○ミニスター、レヂデント	○リール、アドミラル ○メジヨール、ゼネラル、 ○チヤーヂ、ド、アフユヤース ○サブヂ子ード、ヂブロマチック ○ユーゼント、レフト、イン、チヤージ、オブ、ミッシヨンス	○コモドール ○ブリガーテル、ゼネラル ○コンシユル、ゼネラル	○コンシユル	

ハ定數ニ二發ヲ增ス

數ヲ以テス

發シタルトキハ同數ヲ以テ砲臺ヨリ一國毎トニ答砲ヲ發ス可シ又我カ貴官外國ノ軍艦ヲ訪問スルニ當リ其軍艦ヨリ該官ニ對シ禮砲ヲ發シタルトキハ其砲臺ヨリモ同數ヲ以テ答砲ス可シ但シ訪問スル以前豫メ該官ヨリ其砲臺ニ告知ス可シ

第七百四十一　明治九年十二月廿八日達

陸軍省

其省祝砲之儀禮砲ト改稱可致此旨相達候事

第七百四十二　明治十年一月十七日海軍省達

東海鎮守府　軍務局　兵學校

開市場開港場知事縣令ヘ祝砲之儀ニ付兼テ正院ヘ及上申置候處今般別紙之通御指令相成候條其旨相心得所轄艦船ヘモ可達置此段相達候也

別紙

先般上申仕候海軍禮砲表中ニ開市場開港場知事縣令舊習ニ依リ十一發之部ニ記載仕置候處右ハ御取消相成度元來兵馬之權ヲ有セサル者ハ軍禮ヲ以テ送迎スル例無之是迄各國兵艦開港場縣令ニ祝砲致來候ハ全ク彼國「ゴーウルノル」ニ見倣シ其原因ヲ考察スルニ舊政府德川氏之節長崎ヲ以開港場トシ茲ニ長崎奉行ヲ置シハ獨リ長崎ニ關スル儀ニ無之全ク九州一圖之探題ニシテ文武兩權ヲ有シ所謂外國「ゴーウルノル」ニ於ル如ク依テ彼ニ答フルニ「ゴーウルノル」ト云フヲ以テ外國軍艦之レヲ迎フルニ軍禮ヲ以テス其後御一新之際同所ニ鎮臺ヲ被置澤宣嘉長官トナリ之ヲ補佐スルニ參謀ヲ以テス即チ九州「ゴーウルノル」ニ齊シキニ依テ外國兵艦迎フルニ軍禮ヲ以セリ然ルニ其後廢藩置縣之御政體ニ變シ一府之知事一縣之令タル者其管轄內治民之事務ヲ執掌スルノミニシテ更ニ一卒之武權ヲ有セス茲ニ至リ外國ニ稱スル「ゴーウルノル」ト大ニ異ナリ英國所謂「メジヨール」ニ均シキ者其後外國ヘ通告ナキヲ以テ彼依然トシテ前日ノ「ゴーウルノル」ト信用シ今日ニ至リ迎フルニ軍禮ヲ以テス若シ彼ヨリ日本縣令タル者ハ武權ヲ有セス全ク「ゴーウルノル」ニ異ナルヲ以テ軍禮ヲ以テ迎フル條例無之立論スル時ハ聊カ國權ニモ關セサルヲ得ス右之說迫々有之哉ニモ聞及候ニ付テハ彼ヨリ發論無之內縣令祝砲御廢シ可然奉存候依テ英佛米ノ例御參考ノ爲メ左ニ申上候

一英國ニハ各州ニ「ロルド、リフテナント」ト云有名無實ノ知事アリ州務ニ關セス故ニ軍艦等ト交際スルヿナシ自己ノ旗章ヲ有セス將タ端舟頭ニ旗章ヲ揭ケス尤「アイランド、ロルド、リフテナント」ハ此例ニ非ス

一英國各都府ニ「メジヨール」ト稱スル市令アリ（我知事縣令ニ同シキ者）外國軍艦等入港スル時ハ市民ノ總代トナリテ之レヲ訪ヒ或ハ食饌或ハ舞會或ハ外國來客ヲ經應ス然レトモ端舟頭ニ旗章ヲ有セス亦來艦スレトモ軍禮ヲ以テ迎エス

一英國屬地ノ長官ヲ「ゴーウルノル」ト稱シ文武ノ權ヲ握ル故ニ其管轄內ニテ在駐海陸將校ノ上座ニ列ス亦迎フルニ軍禮ヲ以テス

一佛國各縣ノ令ヲ「フレペー」ト稱ス其全縣ノ事務ヲ執掌シ恰モ我知事縣令ニ均シ然リト雖トモ是以テ自己ノ旗章ヲ有セス亦迎フルニ軍禮ヲ以テセス

一佛國ニテ國旗ヲ端舟頭ニ表スルハ獨リ海軍卿ニ限ル

一佛國屬地ハ海軍省ノ管轄ニシテ其「ゴーウルノル」ハ皆海軍武官ヨリ務ムルヲ以テ武官ノ禮ヲ以テ迎フ

一佛國內港ニ於テ端舟頭ニ區別旗ヲ掲ル舟或ハ艦長士官ノ端舟ヲ除クノ外舟尾ニ國旗ヲ掲クルヲ許サス臨時許可ハ司令長官裁決シ其旨各國軍艦ヘ必ス通告スルモノトス

海軍卿ヨリ許可スルニ非サレハ他省ノ官員乘船ヲ示スニ旗章ヲ掲ケサルモノトス

一米國ハ共和國ニシテ諸事他國ト大ニ異ニス

一米國各州ノ知事ヲ「ゴーウルノル」ト云ヒ而シテ體裁恰モ獨逸聯國一王ニ齊シ故ニ其位置各省ノ卿ニ同シ祝砲モ亦同數十五發ヲ以テス

一米國ニテ國旗ヲ端舟頭ニ掲クルハ大統領及ヒ副統領ニ限ル

右ヲ以テ彼是參考スルニ開港場縣令ニ限リ祝砲アリ且縣令舟頭ニ貴重之國旗ヲ掲ケ候儀尤不都合ニ存候甚キニ至リテハ開港場參事國旗ヲ舟頭ニ掲クル者モ有之元來國旗ハ其國ノ尤モ貴重ノ具ニシテ猥リニ用フルモノニ非ス海軍大將ノ重任ト雖モ之レヲ端舟頭ニ掲ケス海軍總督一人ノミ然ルニ即今ノ如ク猥リニ令參事之端舟頭ニ表シ候テハ如何ニモ不體裁ニ候條端舟頭ニ國旗ヲ掲候儀御禁止相成度且前顯縷述之通知事令參事祝砲無之方至當ト存候條禮砲表中ニ掲載伺之分ハ御取消相成度此段上申仕候也

同年八十一號遠ヲ以テ最敬禮ヲ改正ス

明治八年九月十五日

御指令

伺之趣知事令等船頭ニ國旗掲揚禁止之儀別紙之通相達候條此旨可相心得事（別紙略之）

明治九年十二月廿八日

院省使廳府縣

第七百四十三　明治八年二月九日達

第拾八號

文官大禮服着用ノ節敬禮式左之通被定候條遵行可致此旨相達候事

文官大禮服着用ノ節敬禮式

○判任官ノ通常禮服ヲ以テ大禮服ニ換用ノ節モ亦本件ニヨル

○最敬禮

即チ從前ノ磬折ニシテ天皇ニ對シ及ヒ祭祀參拜ノ節此式ヲ行フ

腰ヲ屈メ兩手ヲ膝上ニ當テヽ拜ス即チ宮中等ニテ帽ヲ着サル時ハ第一圖ノ如クシ庭上又ハ路上車駕ニ出逢ヒ或ハ祭祀參拜等ノ節ハ帽ヲ脫シテ左腋ニ插ミ右手ヲ膝ニ當ツル第二圖ノ如シ其祭服着用祭祀奉仕等ノ者ハ總テ此限ニアラス

○敬禮

臣民相互ノ接遇ニ此式ヲ行フ公門內ニ於テハ知ルト知ラサルトヲ論セス之ヲ行ヒ公門

外ニ於テハ相知ラサル者ハ之ヲ行フニ及ハス

第三圖式ノ如ク帽ヲ脱シテ少ク頷ス其宮中等ニテ帽ヲ着サル時ハ僅カニ其頭ヲ頷スルノミ

○

○右ノ外大舍人ノ分番中ハ着帽タルヘク天皇通御ノ外禮式ヲ行フヲナシ但天皇通御ノ節最敬禮ヲ行ヒ三職送迎ノ者及ヒ雜役奉務中ハ敬禮ヲ行フ一般ノ式ニ同シ

○諸門ノ番兵并ニ儀仗兵等文官ニ對シ禮式ヲ行フ時ハ文官ヨリ敬禮ヲ以テ之ニ答フヘシ但已ヨリ先ツ禮ヲ行フヘカラス其車駕ニ扈從シ又ハ公事整列ノ節ハ答禮ニ及ハス

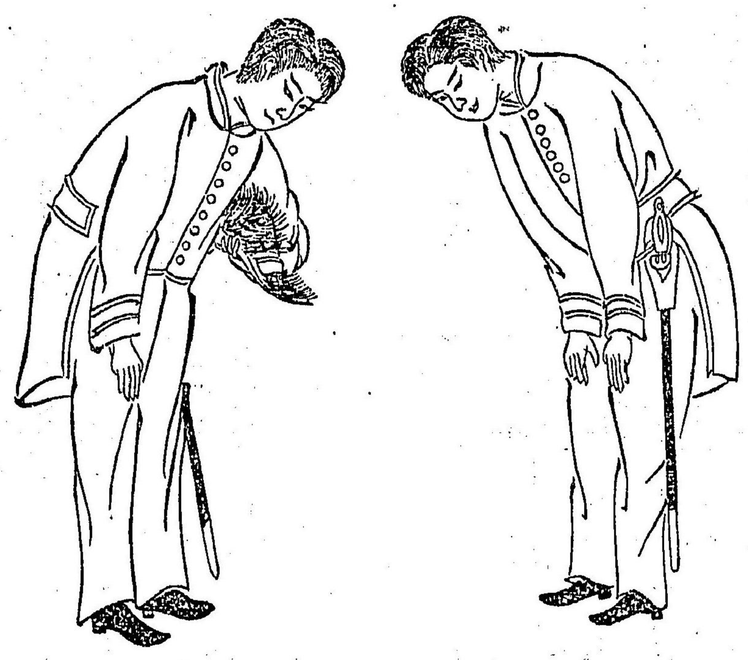
○朝拜其他諸儀式等ニテ列立ヲ要スヘキ時ハ第四圖式ノ如ク整立シ地上ニ於テハ着帽ノ儘タルヘシ但此際脱帽行禮スルハ一般ノ禮式ニヨルヘシ

○非職有位ノ者ハ禮式總テ本文ニ同シ

同年八十一號遠ヲ以テ圖ノ位置改正アリ

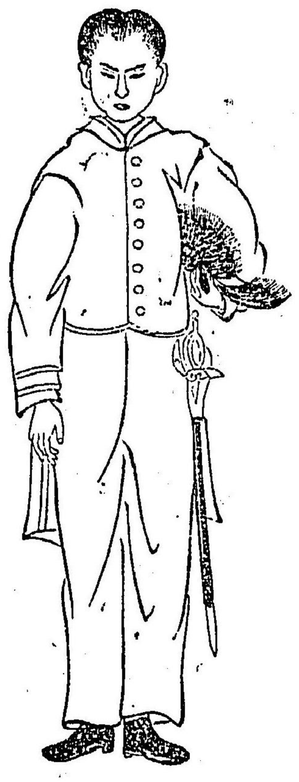
第一圖

第二圖



第三圖

第四圖



第七百四十四　明治八年五月十七日達

第八十一號　院省使廳府縣

本年二月第拾八號達文官大禮服着用ノ節敬禮式中最敬禮並圖式左ノ通改正候條此旨相達候事

○最敬禮

即チ從前ノ磬折ニシテ天皇ニ對シ及ヒ祭祀參拜ノ節此式ヲ行フ

帽ヲ脫シ左腋ニ插ミ腰ヲ屈メ右手ヲ膝ニ當テ、拜ス即チ第一圖ノ如シ若シ宮中等ニテ帽ヲ着サル時ハ兩手ヲ膝上ニ當ツル第二圖ノ如シ其祭服着用祭祀奉祀等ノ者ハ總テ此限ニアラス

○

第一圖ヲ　第二圖トシ　第二圖ヲ　第一圖トス

乘馬

第七百四十五　明治四年四月十八日布告

自今平民乘馬被差許候事

正誤

二百七丁十五行　罷恤役金ハ罷役恤金ノ誤

二百廿三丁書式中十三行　閏ハ閔ノ誤

二百五十五丁五行　役ノ下人相ヲ脫ス

二百六十一丁十六行　軍醫正ノ下一ヲ脫ス

二百六十四丁十三行　取東ハ取束ノ誤

二百六十九丁九行　輕ハ經ノ誤

四百三十二丁十六行　何町村ハ何村町ノ誤植

六百六十二丁十二行　鑑ハ鑑ノ誤

七百十四丁［第七十三］ノ欄外（飛地出張所ハ四年七月十四日廢藩置縣ニ依テ廢ス）ノ頭書ヲ脫ス

七百四十一丁欄外　［增補］ヲ脫ス

七百七十丁三行　陸ハ陛ノ誤

明治十五年五月十九日出版御屆
同　年六月　出版　定價金壹圓六十錢

兵庫縣士族
增訂並出版人　長尾景弼
府下芝區愛宕下町三丁目壹番地寄留

東京銀座四丁目
博聞本社

博聞社出版書目抄錄

岩倉公遺字 久米邦武先生編輯 特命全權大使米歐回覽實記 全五冊

定價金四圓五十錢
但シ上等製本ハ豆部ニ付壹圓七十五錢增シ

此書ハ光年米歐ノ條約國ヘ差遣サレシ全權大使ヨリ國民ヘ各國ノ景況ヲ報告サル、所ノモノナリ岩倉大使ノ側ニ各國ヲ巡ラスル、時ニ當リ出久米兩書記官ヲシテ常ナラシメタル同時ニ出ノ部省理事ニ各國ノ朝廷ニ出セシ政官內大使國務局於テ書記官ヲ太政官ニ報告及ヒ各國ヨリ齎歸ノ書類ヲ摘出シテ補訂再三人民ノ開化ヲ得ルヘキ所ノ人種ノ心ト前後六年ヲ經テ卒業ニ至レリ詳錄政俗觀ル所ハ國體及ヒ總說ヲ前編ニ載ス中間地理風景ヲ觀レハ農牧山嶽坑冶色教育ノ摸擬ニ翻譯作ル而シテ其他人民ノ産業法令ノ沿革ヲ選訪シ及ホシ野ニ生計ノ盛衰ヲ記取シ其人民ノ生業ヲ考ヘ工商ノ盛衰ヲ觀ル武備ニ及ヒ文學ノ制度ヲ察シ要ノ所ニ留ル政治ハ各府官衙ニ歷史及ヒ理學化學ノ異同ヲ論シ法律統計ヲ兼ネ東西洋ノ重學諸書ヲ參考シ實際ニ加ヘ論ヲ加ヘ巡回之ヲ記ス而シテ文章ノ精粗ハ人ノ巧拙ニ成ル人ノ心ヲ用ヒクレハ愈ヲ以テ前後ニ精神ヲ通ジ愈味アルヲ覺フルマテノ書ナリ

田中稻人先生編纂 現行民事成文律類纂

自第一編 至第二編 三冊
定價金七圓五十錢

慶應丁卯王政復古ノ日ヨリ明治十三年六月ニ至ル官省ノ布告達中法令式裁價法延引人事財產契約雇工訴訟等ノ諸件ニ關涉スル法律成規ヲ蒐集シ其既ニ廢止ニ屬セシ者ハ之ヲ刪リ專ラ現行ニ係ル者ヲ拔ヒ巻頭ニ其沿革ヲ掲ケ附錄ニ證券印紙貼用貸借ノ請人證人辨償等舊規則ノ類現行ニ非ルモ契約ニ關涉スル者ヲ採錄セシ書ナリ

市岡正一先生編纂 民法人事編

一冊定價金壹圓三十錢

大政迄始ヨリ十四年三月ニ至ル迄國法規中現行ノ人事ニ關スル法律ヲ類聚シ每條首ニ其要領ヲ掲ケ其次ニ法例ヲ記シ尚ホ注釋附言ノ二項ヲ設ケ該法令中彼是牴觸スルモノ又ハ參照スヘキ事件ヲ記シ併セテ伺指令等ヲ掲ケテ以テ本法ノ不足ノ補ヒ橋メテ涉意ヲ簡明ニセシ書ナリ

全　第三編 自十三年七月 至十四年六月 一冊定價金貳圓

全上 民法契約篇

一冊定價金壹圓六十錢

該書ハ證書代人賣買貸借債借保證附託物賣買入書入登記法出訴期限ノ九編ニ大別シ編又分テ章ヲ設ク三十有餘章分テ五十有餘款トナシ卷中記スル處ノ條件總テ二百數十條凡ソ契約ニ關スル諸件ハ悉テ漏スコトナシ其

讀録タル人甲編ト同一ノ書ナリ

福島縣地理課編纂
地所處分 公布類纂 六冊定價金壹圓八十錢
明治元年ヨリ同十四年十二月ニ至ルマテノ官省布告達中地理ニ關スルモノヲ類纂セシ書ナリ

仝土木課編纂
土木官令類纂 二冊定價金壹圓三十四錢
仝土木ニ關スル布告達ヲ類纂セシ書ナリ

長尾景弼編輯
區畫改正 戸長職務心得 三冊定價 金壹圓七十錢

清浦奎吾先生口述
高輪警察署署員筆記
治罪法講義 隨聽隨筆 自壹編至三編 合卷一冊 正價一圓八十八錢
毎月二號出版 壹冊定價十三錢宛
創定ノ治罪法ヲ講義シ尚ホ參照ノ爲佛埃伯獨墺等諸國ノ法律ヲ記載セシ書ナリ

高木豐三先生義解
校訂 刑法義解 全壹冊定價 金四圓三十錢
改定刑法ヲ講義セシ書ナリ

市岡正一先生著
治罪規程一覽表 定價金拾八錢

仝 諸罰則一覽 全一冊定價金四十錢
林正明先生譯

萬國政談 全三冊定價金六十五錢
有栖川宮御藏版山崎直胤先生纂譯

佛國政法概要 全壹冊定價金八拾錢
山崎先生有栖川二品親王殿下ノ命ヲ受ケ佛人著ス所ノ公法政法ノ諸書ニ就キ其精英ヲ採ヒ其須要ヲ拔リ以テ筆譯セラレシモノナリ

法制局編纂
法制局說明錄 府縣會規則之部 全一冊定價 金三拾五錢

長尾景弼編輯
日本議員必讀 全一冊定價金四十五錢

太政官編譯局譯述
會議便法 全一冊定價金四十五錢

仝
議員必携 全一冊定價金二十五錢

大森鍾一先生譯
佛國縣會纂法 全一冊定價金五十錢
警視局御藏版寺田祐之先生譯

斷訟 死傷檢論 全一冊定價金一圓
原書ハ獨逸人敏解兒氏所著ニシテ本篇ニハ死傷檢斷ノ法

ヲ詳說シ附錄ニハ軍人檢屍法ヲ述モノナリ

奥宮民治先生著
檢屍考 全一冊定價金拾二錢
毆踢殺水焚其他各ノ死屍ヲ檢スル方法ヲ記セシモノナリ

瀧本淳著
臨變必携 全一冊定價金拾二錢
檢屍方法及ヒ溺死人等ヲ救療スル方法ヲ記セシ書ナリ

河野通朴先生編述
檢察一斑 全一冊定價金廿八錢
檢察部規則中緊要ナルモノト編者ノ經驗說トヲ錄シ檢視逮捕彈劾ノ三部類ニ分チシ書ナリ

中山貞一郎編纂
沿革類纂 衛生法規 一冊定價金一圓
明治元年ヨリ十三年三月ニ至ル官省及ヒ東京府東京警視本署ノ布告達并ニ府縣ノ伺指令等初モ衛生上ニ關スル者ヲ纂類セシ書ナリ

松永武英編纂
現行 衛生布令類纂 一冊定價金一圓七十錢
同上衛生ニ關スル官省及ヒ東京府ノ布告達并ニ諸報告等ノ中現行ニ係ル者ヲ類纂セシ書ナリ

桧正明先生譯
租稅全書 全三冊定價金壹圓

仝 經濟入門 全四冊定價金壹圓
末延道成先生譯

英國會社法 全一冊定價金二十錢

今井毅先生編纂
內國統計彙纂 全一冊定價金六十五錢
地理戸籍官ヨリ商業諸況會計等ノ十四門ニ大別シ內國月百ノ統計ヲ記セシ書ナリ

前田正名先生著
接貿易意見一斑 全一冊定價金貳拾錢
直接貿易ノ利害ヲ詳論セシ書ナリ

市岡正一先生編輯
現行 地方警察要書 近刻
地方警察官ノ職務ヲ卷中總則及ヒ行政警察司法警察ノ三編ニ大別シ總テ地方警察官ノ職務ニ關スル法令ハ勿論治罪法中司法警察ニ係ル諸件ヲ抜萃シ更ニ順序ヲ定メテ類聚シ之ニ注解ヲ加ヘ及ヒ伺指令并ニ他令ノ參照ヲ要スル分ヲ附記セシ書ナリ

ボアソナード氏講義
性法講義 全一冊定價金七拾錢

同
法律大意講義 仝 金拾錢

高橋健三先生譯
情供証據誤判錄　全　金廿五錢

ボアソナード氏講義
佛國民法契約篇第二回講義全　金壹圓廿五錢

同
佛國民法期滿得免篇講義全　金拾錢

箕作麟祥先生抄譯
佛國民法契約書解釋方法說明　全金五錢五厘

以上七冊八司法省御蔵版ノ處賣切レニ付奥社ニ於テ飯刻セン雷ナリ

井上毅先生譯
李國憲法　一冊定價金二十錢

市岡正一編輯
刑法治罪法附典類聚　初定價金三拾五錢　貳　近刻

東京淺草田町警察署編輯
大審院檢事横田國臣閲
司法警察要錄　全一冊定價金拾五錢

文部省刊行
輿地誌略　自一至七合卷　活版洋綴一冊定價金壹圓五十錢

津田純一同譯
須田辰二郎
耶蘇教排撃論　全一冊定價金四十錢

一司法省出版書籍一切
一諸官省出版書籍各種
一刑法治罪法　洋紙半紙英濃紙海英摺大中小本及ヒ雷入本并ニ注釋各本
一陸海軍刑法合卷　一冊定價金十錢

以上八書目ノ一部分ヲ揭ク其餘ハ本社出版書籍總目錄ニ譯ナリ

附言

本社營業ハ書籍出版及ヒ販賣○木板、活版、銅、鉛、石版ノ印刷及ヒ活版器械活字インテル罫類并ニインキ製造販賣○洋式帳簿并ニ和洋書籍ノ調製等トス

東京圖書館

新書門

部

類

函

架

號

冊

禁電子式複写

031145-001-9

CZ-3-031

類聚法規（現行）

長尾　景弼／訂

M15-16

BBC-1199